

## ベラルーシ留学報告

福島県立医科大学 医学部学生 本郷剛

### 【期間】

平成 26 年 2 月 10 日～3 月 19 日

### 【派遣者】

本郷剛 福島県立医科大学 医学部 4 年次学生

### 【派遣先】

ベラルーシ医科大学 (ベラルーシ共和国、ミンスク市)

2 月 11 日、12 日、3 月 1 日～18 日

ゴメリ医科大学 (ベラルーシ共和国、ゴメリ市)

2 月 12 日～3 月 1 日

### 【日程】

2 月 10 日(月)	移動	福島→羽田空港
2 月 11 日(火)	移動	羽田空港→フランクフルト→ミンスク
	訪問	ベラルーシ医科大学
	会議	・イグムノフ教授との協議 ・ルデノーク副学長協議 ・ジャーバラノク副学長協議 ・ゴリツェフ准教授協議
2 月 12 日(水)	訪問	ベラルーシ医科大学
	会議	クバルコ先生による講義、協議
	移動	ミンスク→ゴメリ (ゴメリ医科大学公用車)
2 月 13 日(木)	訪問	ゴメリ医科大学
	協議	カズロフスキー副学長との協議
	講義・講演	2 年次公衆衛生学遠隔講義参加 熊谷先生の講義
2 月 14 日(金)	訪問	ゴメリ州保健疫学センター ゴメリ放射線医学研究所 ダブルシュ市庁 ダブルシュ郡中央病院
	協議	タラシェンコ保健疫学センター所長らとの協議 ナディロフ ゴメリ放射線医学研究所疫学部長らとの協議 ダブルシュ市長、市幹部との協議

		ドブルシュ郡中央病院長との協議
2月15日(土)	訪問	ゴメリ医科大学
	講義	学生との交流会 (質疑応答)
2月16日(日)	訪問	ベトカ市 チェルノブイリ事故慰霊碑
2月17日(月)	訪問	ポレーシェ国立放射線環境保護区 ホイニキ郡中央病院
2月18日(火)	訪問	ゴメリ医科大学
	講義	生物化学の講義に参加
2月19日(水)	訪問	Gomel Regional Clinical Hospital (講義) Republican Scientific Practical Center for Radiation Medicine and Human Ecology (研究施設)
	講義	Gomel Regional Clinical Hospital での救急科の講義に参加
2月20日(木)	訪問	市内の学校 (生物学の授業の見学) Gomel State Specialized Clinical Hospital (手術の見学) ゴメリ医科大学
	講義	ゴメリ医科大学での病態生理学
2月21日(金)	訪問	Clinical Hospital No.2 (産婦人科、セラピー科)
2月22日(土)		
2月23日(日)		
2月24日(月)	訪問	Gomel Regional Clinical Hospital (産婦人科)
2月25日(火)	訪問	Republican Scientific Practical Center for Radiation Medicine and Human Ecology (眼科、講義)
	講義	Dept. for international students の内分泌学の講義に参加
2月26日(水)	訪問	ゴメリ医科大学
	講義	軍事医療学、微生物学の講義に参加
2月27日(木)	訪問	Gomel Regional Clinical Hospital (講義、神経外科)
	講義	脳神経外科の講義に参加
2月28日(金)	訪問	ゴメリ医科大学
	講義	一年生の英語の講義に参加
	面会	カズロフスキー副学長との面会
3月1日(土)	移動	ゴメリ→ミンスク (鉄道)
3月2日(日)		
3月3日(月)	訪問	ベラルーシ医科大学
	講義	生理学の講義に参加

3月4日(火)	訪問	小児科病院
3月5日(水)	訪問	1 <sup>st</sup> Clinical City Hospital (産婦人科)
3月6日(木)	訪問	ベラルーシ医科大学
	講義	物理学の授業に参加
3月7日(金)	訪問	9 <sup>th</sup> Clinical City Hospital (神経科)
3月8日(土)		
3月9日(日)		
3月10日(月)	訪問	Emergency Hospital (脳神経外科、放射線生態医学講座)
3月11日(火)	訪問	Oncological Center (手術の見学)
3月12日(水)	訪問	Oncological Center (手術の見学)
3月13日(木)	訪問	6 <sup>th</sup> Clinical City Hospital (消化器科)
3月14日(金)	訪問	9 <sup>th</sup> Clinical City Hospital (循環器科、Minsk Diagnostic Center)
3月15日(土)		
3月16日(日)		
3月17日(月)	訪問	Emergency Hospital (循環器科)
3月18日(火)	面会	ルデノーク副学長との面会
	移動	ミンスク→フランクフルト→成田空港
3月19日(水)	移動	成田空港→栃木

### **【研修の総括】**

17日までは熊谷先生に同行し、その後は、ゴメリ医科大学、ベラルーシ医科大学、およびミンスク・ゴメリ市内の病院を中心に研修を行った。ベラルーシはチェルノブイリ事故を福島原発事故の26年前に経験している。チェルノブイリ事故の影響を強く受けたゴメリと、ベラルーシの首都であるミンスクで研修ができたことは、福島の震災やその後の影響を考えるにあたって、良い経験になった。また、福島県立医科大学からベラルーシへの学生研修が初めてのことであったため、来年度からの学生研修をより良いものにするための情報を得ることができた。

### **【研修内容】**

#### **(1) ゴメリ医科大学**

ゴメリはチェルノブイリ事故の影響を強く受けた土地である。ゴメリ医科大学で研修するにあたり、ベラルーシの医学教育や医療について学び、さらに、いまだに原発事故の影響が残っているのか、人々の原発事故や放射線についての理解や知識はどうであるか、事故以降に生まれた世代は原発事故についてどう感じているかを知ることが目的

とした。

ゴメリ医科大学での研修期間中は、学生寮に滞在した。研修では医科大学の学生にあらゆる面でお世話をしてもらった。

研修日程は、受け入れ先のゴメリ医科大学副学長カズロフスキー先生に決めておいていただいたようであり、2月13日にカズロフスキー先生と協議した際に希望を聞いてくださって、それもある程度反映していただいたようである。

研修中は大学の講義に参加、もしくは市内の病院で研修を行った。ベラルーシの医科大学には附属病院がなく、病院で研修する際は市内の病院へ行く必要がある。市内の病院に講義室がある場合が多く、そこで講義が行われることが多い。研修中は生物化学、救急科、病態生理学、内分泌学、軍事医療学、微生物学、脳神経外科学、英語の講義に参加した。講義はロシア語で行われ、学生に英語で通訳をもらった。講義は10～20人程度の少人数で行われていた。多くの講義において学生や先生との質疑応答の時間を設けてもらった。ベラルーシに対するイメージや、ゴメリ市の印象、日本の医学教育、医療制度などについての質問を多く受けた。教科書は、文字ばかりの白黒のものを用いていた。コの字型に並んだ席で講義が行われることが多く、インタラクティブである。学生はモチベーションをもって講義に臨んでいる。遅刻する学生はおらず、家に帰ってからも毎日のように自主学習をするようである。



## (2) ベラルーシ医科大学

ベラルーシ医科大学では、生理学、物理学の講義に参加した。ここではベラルーシ医科大学の学生が通訳をしてくれた。基本はゴメリ医科大学と形式は同じで、講義は少人数で行われ、講義では毎回宿題が出され、授業の初めに宿題を確認するようであった。ゴメリ医科大学での授業が黒板や文字だけの教科書を使って行われていたのに比べて、ベラルーシ医科大学での講義はパソコンや模型を用いていたのが印象的であった。生理学の講義は心電図についてであったが、講義の一環としてパソコンの教材ソフトを使っていた。

首都ミンスクにあるベラルーシ医科大学の学生は積極的に外国語を学んでいるようであった。ドイツ語もしくは英語を学んでいる学生が多かった。ベラルーシでは医師の給与は低いため、ロシアやドイツで働きたい学生が多いらしい。また、ゴメリ医科大学でも同様だが、女子学生の割合が非常にたかく、12人程度のクラスでは、男子学生は1人か2人だけである。これは、医療関係の職業は女の人の仕事であるという認識によるものらしかった。

ゴメリ・ベラルーシ両医科大学において、質疑応答の時間があると学生は積極的に質問をしてくれた。また、いくつかの講義の前には先生の講座や研究室を案内していただき、暖かい対応をしていただいた。

ベラルーシでは日本から来たというだけで興味を持たれることが多く、学生や先生は日本に対して比較的良いイメージを持っているようである。日本は経済的に成功した国だと言われることが多かった。

ミンスクとゴメリの学生には、生活のレベルに差があるように感じた。学生の学力については分からなかったが、ミンスクの学生のほうがより大人しく、より先進的なイメージを受けた。一方ゴメリの学生は小さいことは気にしない暖かさがあつた。



### (3) 病院研修

ゴメリ・ミンスク滞在中の病院実習では、市内の多くの病院を訪れた。ベラルーシの医科大学には付属病院がないため、医学生は実習が始まる3年生から市内の病院に研修に行く必要がある。午前

は病院で研修をして、午後は大学に戻って講義を受けるなど、ハードな日もあるようだ。講義を聞いて、その後その先生とともにベッドサイドへ行く、というスタイルが多かった。大きな病院には研究施設が併設されている。病院研修においても、現地の学生に通訳をしてもらった。基本的には、講義を含む学生の病院研修に参加するか、先生に病院・病棟を案内してもらうかであった。

市内の病院はゴメリとミンスクで大きく異なっていた。ゴメリ市内の病院は一見して清潔そうに見えないものが多く、階段に出ればタバコの臭いがする病院もあった。ミンスク市内の病院は比較的綺麗であった。病院では、満室なのでベッドを廊下に置くなど、患者に対する配慮が感じられない部分があった。ベラルーシの人々の国民性を考えると、細かいことを気にしない人が多いので、本人はストレスを感じていないのかもしれないが、日本では考えられないことである。また、手術を見学させてもらう際に帽子やマスクをきちんと付けていないドクターが多くいて、衛生面に関する配慮が足りなかった点が気になった。また、ベラルーシでは健康診断の制度があまり成熟しておらず、病気が進行してから来院する人が多い。日本では見られないだろう症例も見ることができた。

病院研修ではドクターに病棟を案内してもらうことが多かった。ドクターたちは忙しそうに働いていたが、日本からやってきた留学生のために、何時間もかけて病棟を説明してくれるということはなかなかできることではなく、ありがたいことであった。ドクターたちの英語力とプレゼン能力の高さに驚かされた。自分の所属する病院を英語で急に紹介しろと言われて対応できるドクターは、日本では少ないだろう。



## 【所感】

ベラルーシでもチェルノブイリ事故の後に、多くの変化があったようだ。被ばく医療に関する新しい病院や講座を設立し、学生に対する放射線に関する教育に力を入れているようである。

ベラルーシの人々は、想像していたよりも放射線の影響から逃れて落ち着いた生活を送っているように見えたが、肺癌を原発のせいにするなど、いまだに原発の影響を心に抱えている人もいた。学生はチェルノブイリ事故以降に生まれた世代であるが、チェルノブイリ事故のことは皆が認識しており、冷静な目で事故を理解していると感じた。ベラルーシには事故により避難した人やその家族がたくさんいる。事故から26年たったいまでも病院に健診を受けに来る人がいる。

ベラルーシの人々は小さいことは気にしない人が多く、大雑把な印象を受けるが、その分暖かい人が多く、どこへ行っても歓迎されないことはなかった。大雑把であるがゆえに、自身の健康にも無関心な人が多いがために、病期が進行するまで受診しないこともあるようだ。チェルノブイリ事故と福島原発事故において、その後の影響で異なるのは、福島原発の場合は人々の精神的影響が強くなるだろうということである。福島の事故では、比較的早期に放射線防御の対策がなされたため、チェルノブイリに比べると被ばくは防ぐことができたが、その分放射能被ばくへの恐れや、避難によるストレスからの精神的な影響が懸念される。また、ベラルーシと日本では国民性は大きく異なるようである。日本ではベラルーシよりも医療が発達しており、国民も医療を頼りにしている。その点においても、日本の医療が負う役割は大きい。今後ベラルーシと福島の間で多くの協力が行われると思うが、両国の状況や国民性の違いに注意しなければならない。

今回の派遣で、福島をグローバルな視点で見つめることができた。お世話をしてくれた方々のおかげで、常に刺激的な研修ができ、退屈することは少なかった。